國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕斎藤菜穂子著『蜻蛉日記新考―兼家妻として「書く」ということ―』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福家, 俊幸, Fukuya, Toshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000452

〔書評〕

斎藤菜穂子著『蜻蛉日記新考 —兼家妻として「書く」ということ—』

福家俊幸

斎藤菜穂子氏の二番目の著作が上梓された。題して『蜻蛉日記新考—兼家妻として「書く」ということ—』という。最初の著作である『蜻蛉日記研究—作品形成と「書く」こと—』（武蔵野書院）が上梓されたのが二〇一一年のことだったので、本書は斎藤氏のその後の七年の歩みが刻印されていることになる。まず本書の目次を掲げ、その概要を確認することにしよう。

はじめに
Ⅰ　上巻における〈兼家妻〉としての社交の様相
第一章　時姫との「真菰草」の贈答歌考 —端午の節句時の交際として—
第二章　上巻の御代替わり考 —兼家の妻としての行動—
Ⅱ　安和の変をめぐり構成される記事
第三章　小弓の記事における「柳の糸」と「柳のまゆ」の贈答歌考 —「眉」と「繭」の掛詞をめぐって—
第四章　中巻の「桃の節句」と「小弓」の記事について —安和の変の直前に書かれたこと—
第五章　安和の変直後の長精進と病臥 —正五月と閏五月の対応—
第六章　兼家の御嶽詣 —安和の変後に求められた加護—
第七章　愛宮への長歌と「多武峯より」との関わり —喚想される過去の悲劇—
第八章　愛宮との贈答歌記事と屏風歌記事の意味 —安和の変後の御代替わり期として—
Ⅲ　安和の変後の新たな方向性
第九章　中巻の「内裏の賭弓」の意義 —小弓の記事との関係から—
第十章　下巻の正二月・閏二月の漢詩文的表現群 —つくり出された春の情景—
まとめ　『蜻蛉日記』における「書く」ことと〈兼家妻〉としての自意識

斎藤氏の二冊の著作はいずれも『蜻蛉日記』を中心に論じたものである。『蜻蛉日記』は平安時代の仮名日記の中で現存する最大の作品であり、女性の書いた日記文学の嚆矢である。文学史的にも重要な作品なので『蜻蛉日記』を主要な研究対象とする研究者は少なくないが、それにしても脂の乗りきった壮年期に、連続して『蜻蛉日記』の本格的な著作を世に問うた研究者は稀であろう。

斎藤氏はまさに『蜻蛉日記』一筋というべき研究者であり、それだけに信頼性の高い思考と論理が本書を貫いている。お門違いな物言いかもしれないが、レストランに喩えれば、本書は一品に心血を注いだまさに専門店にふさわしい。本書は紛れもなく専門店の味がすると言って良いだろう。『蜻蛉日記』の表現一つ一つに、先行・周辺作品との関係性が見定められ、たえず作品の表現全体を視野に収めた論述が展開している。先行研究の押えも丁寧で周到である。ともすれば、観念が先走り、本文が置いていかれるような論が流通しているが、そうした弊害と本書は無縁である。そこにしっかりした注釈的な眼が根付いていることを斎藤氏の研究の特質として指摘しておきたい。

評者が本書で一番興味深く読んだのは、第一部の「第二章上巻の御代替わり考」である。斎藤氏は兼家の妹登子に贈った和歌に付けられた、荷を負わせ足に瘤を付けた木の人形につき、登子が母代わりであった、幼い東宮守平親王に渡ることを想定して贈ったと考察している。この奇妙な人形がなぜ贈られたのか、従来あまり問題にされてこなかったが、この斎藤氏の見解は独自性が高く、蓋然性も高いものと思われる。

御代替わりという政治的な変動期に、作者道綱母が夫兼家の意思を代行するように和歌はもちろん、このような玩具の献上で夫を支えていたこと、さらにいわば内助の功のような行為を記したことは『蜻蛉日記』の読みに一石を投じるものであろう。

政治的な変動期といえば、第二部「安和の変をめぐり構成される記事」は第三章から第八章までの論考を収め、本書の中核を成しているが、この政変をめぐる記述からも、斎藤氏は兼家の妻としての作者が迫り出す読みを展開している。氏は安和の変前後の記述に兼家の存在が薄いという観点から、読者に兼家がこの政変へ関与していないことを言外に伝える効果を指摘している。そこにおのれの書きものを読者との関係性の中で、政治的に利用する、現実的な効用が読まれているのである。ここにも兼家の妻として、夫や子に間接的に奉仕する叙述のありようが見据えられていると言ってよいだろう。なお、斎藤氏は兼

家が安和の変に実際に関与したかどうかは別の問題として考察の対象としていない。その慎重な姿勢は是とすべきであるが、一方で道綱母が安和の変に無縁であることを表出する必然性は事実レベルを超えて当時周囲が兼家の安和の変への関与をどう見ていたかということと関わるだろう。その意味で、論者の好みもあるのかも知れないが、この政変が特に女性側からどのように受け取られていたのかという問題や、妻として女性として、政変の被害者との交流を書く意義をさらに考えると、論の説得性や重層性が増すのではないだろうか（それは『多武峯少将物語』の世界と重なる問題とも繋がるだろう）。

そもそも本書は副題に「兼家妻として「書く」ということ」とあるように、兼家妻という立場から書き、それを読者に向けて発信するところに『蜻蛉日記』の本質が見出されている。『蜻蛉日記』を夫の夜離れを嘆き、おのれの内面を見つめた書として捉える従来の見方に対して、近時兼家の和歌を掲載する兼家歌集としての側面（今西祐一郎氏など）が指摘され、さらに兼家の妻としての生活を「書くこと」で、それを新たな「ためし」として世（貴族社会）に問う作品（石坂妙子氏、吉野瑞恵氏など）とする見方が提起されている。本書もそのような新しい動向に拍車をかける有力な成果として学界を裨益するに相違ない。

斎藤氏は兼家の妻という認識は書き進める営為だけではなく、それに対する読者の反応を得ることで、深まったと考察する。読者との関係性を作品形成の中でダイナミックに押さえる観点は有益で、「書く」行為を自閉的に捉えていない点で共感されるところが多い。特に『多武峰少将物語』との表現の関係性から、この物語との創作圏・享受圏の重なりを指摘するところは本書の貴重な成果だと思う。一方で、読者との関係性を考えるとき、この作品が巻ごとに流布したのか、あるいはもっと小出しに公開されたのか、という問題は等閑にはできないだろう。安和の変に夫が関係ないことを読者に伝達する効用があったとすれば、そこで差し出されたテクストが現存の鳴滝まで含んだ中巻全体なのか、あるいは前半の部分的なものなのかは大きな問題であるように思われる。もちろん斎藤氏は「まとめ」で、それまでに書いたものを包摂して新たに意味づけていくという『蜻蛉日記』の他の仮名日記とは異なる独自性を述べていて示唆的である。ただ本書ではやや具体性を欠いた概説的な論述に留まっているとも思われる。周到な斎藤氏である。今後そうした独自性が奈辺から生み出されたのか論証することを期しているのではないかと推察され、その暁には従前の研究と一線を画する、革新的な『蜻蛉日記』論が出現することになるだろう。

最後に「第六章　兼家の御嶽詣」に言及したい。御嶽詣では寛弘四年の息子道長のものがあまりに有名であるが、兼家のそれは目的も含めてあまり言及されることがなかった。斎藤氏は兼家の御嶽詣での目的を当時の政治状況の中で可視化させ、後裔の先蹤となったと説く。実際に兼家の御嶽詣では『蜻蛉日記』のみが伝え、斎藤氏の「『蜻蛉日記』の記事の史料的な価値を再評価すべき」ということばは重く、今後の『蜻蛉日記』研究に着実に新たな視界を拓いている。まさに専門店の醍醐味であるが、そろそろ斎藤氏による他の作品を対象とした論考も読んでみたい、新メニューの導入も望みたいと思うのは、この充実した成果を前にした客側の望蜀の願いだろうか。

（A5判、二八八頁、武蔵野書院、二〇一八年三月発行、定価九五〇〇円＋税）